

除本理史・河北新報社編

『福島「オルタナ伝承館」ガイド』



紹介者：鈴木 宗徳

本書は、本誌793号の特集「継続する福島複合災害——原発事故被害の現在」に寄稿している除本理史（大阪公立大学教授）らによる最新刊である。その寄稿論文のなかで除本は、「官製伝承」に偏らない多様な視点からの伝承がもつ「闘争」の意義を主張している（除本2024）。本書は、原発事故の経験を現地福島で学ぶためのガイドブックであるとともに、震災・原発事故の記憶をめぐる「闘争」の最前線を記録したものと言える。

ここで言う「官製伝承」とはなにか。清水奈々子ら（2022）によれば、たとえば東京電力が2018年に富岡町に設立した「東京電力廃炉資料館」については、事故原因について裁判とは異なる主張をしている、都合の悪い事実が展示に含まれていないといった指摘がなされてきた。また、福島県が2020年に福島イノベーション・コースト構想の一環として双葉町に建設した「東日本大震災・原子力災害伝承館」は、福島県自身の事故責任の総括が不十分であること、館内の被災経験の語り部のマニュアルにおいて「特定の団体への批判・誹謗中傷等は含めない」との指示がなされ、話す内容の事前チェックと修正が行われていたことが批判され

てきた。

福島には、こうした伝承施設に対するオルタナティブと呼べる施設が次々と生まれている。ただし本書で除本は、官製伝承をすべて否定しているわけではない。開館当初から新聞報道で批判されてきた上記「東日本大震災・原子力災害伝承館」は、2021年には展示を見直すとの発表をしている（除本・林2023）。「公的施設には独自の役割があるし、スタッフの中には『オルタナ』の精神をもつ人もいるかもしれない」のである。ただしそれでも、行政は「中立な第三者」ではないため視角に限定が生じるのは避けられない。

本書は、「おれたちの伝承館」（南相馬市）、「伝言館」（楡葉町）、「原子力災害考証館 furusato」（いわき市）という三つの民間の伝承施設を紹介するとともに、大熊未来塾代表・木村紀夫氏、富岡町3・11を語る会代表・青木淑子氏、いわき語り部の会幹事・小野陽洋氏という、三人の語り部のインタビューを掲載している。以下、伝承施設についてのみ簡単に紹介しよう。

南相馬市小高区にある「おれたちの伝承館」は、チェルノブイリや水俣から学んできた写真家の中筋純氏が、2023年に開設した。事故と向き合ってきたアーティスト21人による80点の作品が展示され、餓死した子牛を模した立体作品や原子力PRの看板の標語の一部をレプリカにした作品などが並んでいる。楡葉町の宝鏡寺の境内にある「伝言館」は、住職の早川篤雄氏が2021年に開設した（翌年死去した早川氏は、のちにNHK「こころの時代」でも取り上げられた）。1975年から原発の許可処分取消訴訟に取り組んだ早川氏が収集した資料や、立命館大学の安斎育郎名誉教授が提供した原爆や第五福竜丸関連の資料などが展示されている。

「原子力災害考証館 furusato」は、いわき湯本温泉の老舗旅館「古滝屋」の一部に、館主の里見喜生氏が2021年に開館した。津波で行方不明となった家族の救助・捜索を、原発事故のために許されなかったという木村紀夫氏が提供した次女の遺品、そして事故後に変化してゆく浪江町の街並みの写真パネルなどが展示されている。

原発事故の被災経験は多様で、居住地、職業、性別、年齢ごとに大きな違いがあると言われる。事故直後の辛苦のみならず、時間を経てから葛藤や喪失感を体験することも多い。「復興が成功した」という語りに還元されないこうした経験は、これから少しずつ記録され、保存され、発信されてゆくことであろう。しかし、被災経験の複雑な実態を伝承することは容易ではなく、民間施設ゆえの資金面での困難もある。本書には、公的施設も含め21の伝承施設のリストが掲載されている。これらを訪問したり、語り部の話に耳を傾けてみることを強く勧めたい。

また、関連書として、参考文献に挙げた『公害スタディーズ——悶え、哀しみ、闘い、語りつぐ』（2021）と『公害の経験を未来につなぐ——教育・フォーラム・アーカイブズを通じた公害資料館の挑戦』（2023）の二冊もお薦めしたい。どちらも除本理史と、大原社会問題研究

所「環境アーカイブズ」のスタッフが寄稿している。除本の「伝承は闘争である」という主張は、福島第一原発事故にかぎらず公害問題と取り組んだ多くの人々に共通する思いであろう。前者の著作には全国の公害資料館が詳しく紹介されているが、伝承施設や資料館とはこうした役割も担っているのである。

（除本理史・河北新報社編『福島「オルタナ伝承館」ガイド』東信堂、2024年9月、64頁、定価900円＋税）

（すずき・むねのり 法政大学社会学部教授）

【参考文献】

- 安藤聡彦・林美帆・丹野春香編著（2021）『公害スタディーズ——悶え、哀しみ、闘い、語りつぐ』ころから
- 清水奈々子（執筆主担当）ほか（2022）「教訓の継承をめぐる課題」原子力市民委員会『原発ゼロ社会への道——「無責任と不可視の構造」をこえて公正で開かれた社会へ』インプレス R&D, 94-97 頁
- 除本理史・林美帆（2023）「福島原発事故に関する伝承施設の現状と課題——民間施設の役割に着目して」清水万由子・林美帆・除本理史編『公害の経験を未来につなぐ——教育・フォーラム・アーカイブズを通じた公害資料館の挑戦』ナカニシヤ出版, 75-90 頁
- 除本理史（2024）「被害回復に向けた賠償・復興政策の問い直し——『闘争』と『継承』の両側面から長期的復興課題を考える」『大原社会問題研究所雑誌』793号, 2024年11月, 4-19 頁